

諷刺歌謡が語る現代イギリスの「奴隷制」

—奴隷貿易禁止法成立二百周年のカリブソを事例として—

“Slavery” in Modern Britain Symbolized in Songs of Satire

— An Interpretation of Calypsos Written in the Bicentenary of the Abolition of the Slave Trade —

木村葉子

Yoko Kimura

はじめに

2007年3月25日は、奴隷貿易禁止法が成立してから二百周年にあたる。15世紀から19世紀にかけて行なわれた大西洋奴隷貿易では、アフリカから大西洋を渡った奴隷の数は1,200万人を超え、人類史上最も凄惨をきわめた中間航路の航海では、200万人以上が命を落とした¹。この奴隷貿易を禁止する法案がイギリス議会で成立したのが、1807年3月25日である。その二百年後に禁止法成立を記念する様々な行事がイギリス各地で行なわれた²。それに先立って2006年11月に当時の首相トニー・ブレアは、大西洋奴隷貿易を内包する「奴隷制」を深く恥じ入ると遺憾の意を表明した。政府をあげての「奴隷制」に対する取り組みには、大西洋奴隷貿易だけでなく、売春などの人身売買、子供の労働や低賃金労働などの「現代の奴隷制」も含まれている。

禁止法成立二百周年に行なわれた一連の記念行事で禁止法成立の立役者とされるのは、18世紀の国会議員ウィリアム・ウィルバーフォースである。2007年のノッティングヒル・カーニバルの仮装パレードも記念行事のひとつであるが、それとは違った視点で「奴隷制」をとらえている。8月の最終週の連休に開催されるノッティングヒル・カーニバルで、中心的な役割を演ずるのは、カリブ海地域の旧イギリス植民地出身者とイギリスうまれの第二、第三、第

四世代を含むアフロ・カリブ系で³、大西洋奴隷貿易でアフリカからカリブ海地域に売られた奴隷の子孫にあたる。ノッティングヒル・カーニバルは、1834年の奴隷解放後に元奴隷がはじめたトリニダード・カーニバルをルーツとするカリビアン・カーニバルのひとつである。カリブ海地域、北米、イギリス各地で展開するカリビアン・カーニバルでは、仮装パレード、スティールパン、カリプソが芸術文化の三要素となっている。スティールパンはアフリカンドラムを起源とし、1930年代にトリニダード・トバゴ（以下トリニダードと略す）で都市の廃品からうまれた楽器である。諷刺歌謡のカリプソもアフリカ起源の歌謡で、トリニダードで発展した。

カリプソはカーニバルと共に展開し、トリニダードと同様に、ロンドンでもカーニバルの行事として、カリプソの競技会「カリプソ・テント」が開催される。カリプソの歌い手であるカリプソニアンが時事的な社会批評を加えたカリプソを歌って競い合い、優勝者はカリプソ・モナーク（王や女王）になる。トリニダードでは多額の賞金を獲得し、国民的英雄であるが、ロンドンのカリプソ・モナークの賞金は、2009年までが500ポンドで、現在では900ポンド（約12万円）になったものの、トリニダードとは雲泥の差がある。

本稿は、2007年にロンドンのカリプソ・テントで歌われたふたつのカリプソの歌詞から「奴隷制」に対するメッセージを解釈する。カリプソは、口承伝承で文化を伝えた吟遊詩人グリオの伝統をもち、アフリカ起源の音楽の中でも歌詞の重要性は際立っている。第1節から第3節では、最高位決定戦で歌われたアレクサンダー・D・グレート（以下アレクサンダーと略す）の「今年は奴隷制を思いおこす年（This is a Year for Remembering Slavery）」の歌詞を検討する。この曲は、のちに『ファイネスト・カット（Finest Cuts）』というアレクサンダー個人が制作したCDに収録された。ファイネスト・カットとは、「最もすばらしい作品」という意味で、アレクサンダーがこれまでに作ったカリプソのうち、最も気に入った曲が10曲収めてある。同時に、ファイネスト・カットには「最も細かい傷」という意味もある。ごく小さな傷が大きな問題に発展するきっかけになることも暗示し、アフロ・カリブ系の感

情の細かい機微を歌いあげたものである。第4節では、グレナダ出身のカリブソニアン、ピース・アンド・ラブが歌った「奴隷制をやめさせろ！」を用いることで、さらに違った観点から「奴隷制」の問題を検討する。

1. カリブソの歌詞から読み解く奴隷貿易禁止法成立

アレクサンダーはドイツ人の父とアフリカ系トリニダード人の母をもち、大半がアフロ・カリブ系であるカリブソニアンの中では異色な存在であるが、イギリスのカリブソ普及活動の第一人者である。2010年と2011年にカリブソ・モナークを獲得し、BBC ラジオでも時事的なカリブソを歌っている。

アレクサンダーが2007年にカリブソニアンの最高位決定戦で歌った「今年は奴隷制を思いおこす年」は、英語で書かれた八行詩で、二行ずつがひとつのセットになり、四つの部分から構成されている。英語では、行の最後の単語が韻をふむことにより、曲全体の調子を整えている。本稿は、英語の歌詞を筆者が日本語に訳し、その歌詞の意味を検討する。第1節では、大西洋奴隷貿易が行なわれていた時代の「奴隷制」をテーマとしている。

1. 歴史はウィルバーフォース (Wilberforce) をもちあげようとしている
 もちろん (of course) みんなわかっている、かれが奴隷貿易禁止法を撤
 廃したことを
 でも、もっとアフリカ人 (race) の功績をみとめてあげよう
 トゥサンやエキアノには、神の恩寵 (grace) はないのだろうか
 ハイチは、カリブ海の王冠 (crown) の宝石だった
 ナポレオンはルヴェルチュールと戦ったけれど、
 かれを打倒する (bring down) ことはできなかった
 グスタヴ・ヴァッサは本当の奴隷の物語 (story) を書いたのに
 どうしていつもイギリス人の政治家が栄光 (glory) を勝ち取るの？

一番の最初の部分は、「奴隷制」に対するメッセージの核心からはじまる。

「奴隷制」はつねに「白人」の視点でとらえられ、「白人」の貢献が当り前とされるイギリス社会の一般的な考え方に対して疑問を投げかけている。奴隷貿易禁止法はウィルバーフォースによって成し遂げられたことは、イギリスでは周知の事実であるが、国会議員のかれだけが立役者なのだろうかという問いである。

では、奴隷貿易がどのようなもので、奴隷貿易禁止法がどのような経緯で成立したかについて概観してみたい。大西洋奴隷貿易では、奴隷獲得のため、アフリカ各地で戦争や抗争、襲撃や略奪が繰り返されていた。捕えられた奴隷は手を縛られたうえ熊手状の木の首輪をはめられ、アフリカの内陸部から数百キロ離れた海岸部まで歩いて連行された⁴。大西洋を渡る中間航路の奴隷船内では身体に焼印され、二人一組が鎖に繋がれ、全裸で船倉に押し込められた。病気と狂気が蔓延し、反抗すれば残虐な懲罰や拷問が加えられた⁵。

アフリカから大西洋を渡ると、砂糖などのプランテーションでの過酷な労役と精神的圧迫や屈辱が待ち受けていた。こうした非人道的な大西洋奴隷貿易によって、アフリカから奪われた人々の数は、働き盛りの年齢層を中心に、2,000万人から3,000万人にのぼると試算されている⁶。歴史学者で、トリニダードの初代首相をつとめたエリック・ウィリアムズは、18世紀半ばまでにイングランドのほとんどの都市が、大西洋奴隷貿易を含む三角貿易と関わり、その利潤が産業革命の資本蓄積の中心となったことを明らかにした⁷。

イギリスに莫大な富をもたらせた大西洋奴隷貿易が禁止されたひとつの要因は、18世紀半ば以降、砂糖に対する高い関税が撤廃されたことがあげられる。カリブ海地域で展開されてきた奴隷労働力による砂糖の生産は、高い関税で守られてきたが、その後、奴隷の労働力によらない生産方法が導入され成果をあげるようになると、危険を冒して行なわれてきた奴隷貿易の利点が失われた。ふたつ目の要因としてあげられるのは、18世紀半ば以降の啓蒙思想や1776年のアメリカの独立により、イギリス人の価値観や世界観が変革したことである。アメリカでは、いち早くクエーカー教徒が奴隷解放運動に着手し、イギリス国教会に属する福音主義集団、クラッパム派の人たちがそれ

に呼応した⁸。このクラッパム派のリーダーがウィルバーフォースで、グランヴィル・シャープやトマス・クラークソン、ハンナ・モアらのメンバーが協力した⁹。クラークソンは、シャープやイギリス屈指の陶磁器製造の創始者、ジョサイア・ウェッジウッドらと1789年に奴隷貿易廃止協会を設立した。

ウィルバーフォースは、1791年に奴隷貿易廃止法案を下院に提出し、法案は否決されるが、賛同者は増加した。翌年かれの法案は圧倒的な支持を得て下院を通過するが、上院の激しい抵抗とフランス革命の激化で成立が阻止され、活動は一時停止状態に陥る。1804年にナポレオンによるフランス帝国が成立すると、ウィルバーフォースは再度法案を議会に提出し、1807年3月に奴隷貿易廃止法案が議会で可決された。その年の5月以降、奴隷船の出航が停止し、翌年の3月には植民地での奴隷の陸揚げが禁止されたが、帝国内で奴隷制度が廃止されたのはさらに二十数年を経た1833年であった¹⁰。

アレクサンダーのカリプソでは、奴隷貿易禁止法案成立に貢献したのは、ウィルバーフォースばかりが称賛されるが、「黒人解放者」トゥサン（ルヴェルチュール）や奴隷としての回想録を書いた（オラウダー）エキアノなどの「黒人」にも敬意を払う必要を説いている。そこで、アレクサンダーのカリプソで「王冠の宝石」と歌われたカリブ海のサンドマングが、初の黒人国家ハイチ共和国に至るまでの歴史的背景を記すことによって、トゥサン・ルヴェルチュール（以下トゥサンと略す）の生涯を追ってみたい。

1789年のサンドマングは、約50万人の奴隷の労働力を使い、フランスの海外貿易の三分の二を供給する世界最大の植民地であった。フランスの誇りであり、他の帝国主義諸国の羨望の的であったが、フランス革命が勃発し、サンドマングにもその波及が始まった1791年、過酷な労働に苦しむ奴隷が反乱をおこし、その闘争は12年続いた¹¹。この反乱奴隷のリーダーとなるのがトゥサンである。1800年には、トゥサンはサンドマングのほぼ全域を平定し、1801年には、ナポレオンから将軍に任命される。同年、総督から支配権を委譲され、奴隷制の廃止を宣言するとともに、「フランス領植民地サンドマング憲法」を制定した。この憲法の第3条では、「この領土において奴隷は存在し得

ない。およそ隷属というものは永久に廃される」と規定され、「奴隷制度の廃止」が明文化された最初の憲法であった。この憲法では、総督に法律上、財政上、軍事上すべての権限が与えられ、トゥサンが終身の総督とされた。ナポレオンはこの憲法を「フランスへの裏切り」として激怒し、ハイチ革命に対して本格的に介入していく。ナポレオンは密かに奴隷制の復活を企て、トゥサンは陰謀によって捕えられたのち、艦船「英雄」号でフランスに送られ、1803年に獄中で非業の最期を遂げた。しかし、トゥサン亡き後も「戦争には戦争を、犯罪には犯罪を、残虐行為には残虐行為を」という合言葉のもと戦いは続けられた。「山の多い土地」というハイチの国名が示すような土地でのゲリラ戦でフランス軍は大敗し、1803年12月にハイチ独立戦争は終結した。1804年1月1日、奴隷の蜂起から結成された革命軍は、「フランスを正式に放棄する宣言」を発し、史上初の黒人国家ハイチ共和国がうまれた。1805年に制定された憲法では、第5条に黒人奴隷制の永久廃棄が謳われ、独立国家の憲法で奴隷制廃止が記された最初の条項となった¹²。

アレクサンダーのカリブソでは、「ナポレオンは（トゥサン）ルヴェルチュールと戦ったが、かれを打倒することはできなかった」と歌っている。トゥサンはハイチの独立をみることなく、フランスの要塞の獄中で病死するが、かれの精神を引き継いで黒人国家が誕生した。それによって、フランスは「王冠の宝石」である重要な植民地を失った。それだけではない。独立までの9か月間にフランス側に6万人の犠牲者が出た。黄熱病などによる病死者が、戦死者をはるかに上回ったのである。「力づくで服属させようとしたのは大きな誤りであった。トゥサンを仲立ちにして支配することで満足すべきだった」と、ナポレオンは、流刑地セント・ヘレナで回想するのであった¹³。

アレクサンダーのカリブソで光をあてるもうひとりの人物が、オラウダー・エキアノ、またの名がグスタヴ・ヴァッサである。「グスタヴ・ヴァッサは真実な奴隷の物語を書いた」という歌詞にあたるものは、1789年にかれが書いた自伝回想録『アフリカ人、オラウダー・エキアノ、またの名をグスタヴ・ヴァッサの興味深い物語（The Interesting Narrative of the Life of

Olaudah Equiano or Gustavus Vassa, the African)』である。エキアノの回想録は、生まれ故郷のベニン王国が、ギニア地域にある数ある王国の中でも豊かな文化や風土を有していたことから始まる。エキアノは1745年、ベニン王国のエサカ、現在のナイジェリア南東部にあるイグボで生まれた。エキアノの父は奴隷を何人か保有する首長で、5人の兄と妹と共に恵まれた環境で平穏に暮らしていた。エキアノの名前、オラウダーは、幸運という意味で、エキアノは家族に愛されていたが、11歳のある日、事態は一変する。

エキアノは誘拐され、半年余りの間、アフリカの各地に売られたのち、奴隷として船に乗せられ、大西洋を渡る。奴隷船内では鎖につながれ、身動きすらできない阿鼻叫喚の世界を体験した。バルバドスに連れられた数日後、バージニアのプランテーションに売られ、そこでの約1ヶ月間の奴隷生活のあと、イギリス王立海軍将校マイケル・ヘンリー・パスカルに34ポンドで買い取られた。アメリカからイギリスへ渡る船で、パスカルは、エキアノの奴隷としての身分を隠すため、グスタヴ・ヴァッサという名前をつけた。1757年春、イングランド南西部にあるファルマスに到着し、1758年には、ボスコーク海軍大将の指令のもと、カナダのノヴァ・スコシアにあるルイスバーグの要塞破壊にも参戦した。七年戦争の間には、パスカルの下、海軍の戦艦で火薬運搬係として働き、パスカルは戦争が終わったら、エキアノを自由の身にすると言っていたが、戦争が終わると約束を反故にしまい、エキアノは1762年、再び奴隷としてカリブ海地域に向かう船に乗せられた。

1763年から1766年まで、エキアノはカリブ海地域各地で奴隷に対する残虐行為を目のあたりにした。エキアノは商品取引によって資金を蓄え、1766年に40ポンドで自由の身になった。商船の船乗りとして働き、1767年再びロンドンへむかう。1773年には、ジョン・フィップス隊長のもと、インドをめざす北東航路を発見するため、北極へと向かう名誉ある遠征隊に加わったこともある。この経験のあと、かれは、元奴隷の友人を救うために奴隷解放運動の中心人物、クラッパム派のシャープに援助を求めた。シャープと協力体制を組み、エキアノは奴隷解放運動に使命感をもつようになっていく。

フランス革命が勃発した1789年、エキアノの回想録の初版がロンドンで発刊された。ついで、1791年にニューヨークでも出版され、1794年にロンドンで出版された第9版では、エキアノにイギリス全土だけでなく、オランダやドイツからも奴隷解放に関する講演の依頼があったことが記してある。回想録は、英語だけでなく、ドイツ語などでも出版された。

エキアノは1791年4月に白人女性スザンナ・カレンと結婚し、長女のアン・メアリーが1793年10月に、次女のジョアンナが1795年4月に誕生する。しかし、束の間の幸せな家庭生活は、1796年2月に妻のスザンナが、1797年3月にエキアノ自身が、1797年7月に長女のアン・メアリーが相次いで亡くなることで終わりを告げた¹⁴。エキアノの死の床を見舞ったシャープは、それから奴隷貿易禁止法に向けて、エキアノの意志を引き継いだ¹⁵。

エキアノの回想録は奴隷解放に対して大きな影響を与え、エキアノは当時の首相ピットとも会見したが、奴隷貿易禁止法が1807年に成立するのを見とどけることなく、その10年前にロンドンで没した¹⁶。奴隷貿易禁止法のきっかけとしてエキアノの果たした役割はあまりにも大きい、アレクサンダーのカリプソが語るように、立役者として栄光をあげるのは、ウィルバーフォースのように「白人」のイギリス人の政治家が中心である。ルヴェルチュールやエキアノのような「黒人」がイギリスの歴史の中でもっと脚光をあげ、当時大きな人気を博したエキアノの回想録が、今でも多くの人に読み継がれる必要がある。自らが奴隷であった過酷な経験をエキアノは生涯をかけて世に知らしめたからこそ、奴隷貿易禁止法が成立したのではないだろうか。イギリスにおける歴史観の中で、暗黙のうちに当然視されている「白人」の優位性にこのカリプソの歌詞は批判の眼を向けている。

2. カリプソの歌詞から読み解く近代の「奴隷制」

カリプソでは一番が歌われると、コーラス嬢や聴衆も声を合わせて歌うコーラスになる。コーラスの部分は、二番、三番と続いてもそれらの間に挿入される。すなわち、カリプソの歌詞全体に通底する共通のテーマで、作者

の主張がこめられた部分である。

〈コーラス〉

今年は奴隷制 (slavery) を思いおこす年
 最も不快な (unsavoury) ヨーロッパの歴史
 政治家だけでなく－黒人の人たちの勇敢さ (bravery)
 それが奴隷制 (slavery) を終わらせたもの

「今年は奴隷制を思いおこす年」というカリブソで最も主張したいことは、「黒人」の視線からも「奴隷制」の歴史をとらえる必要があることである。アレクサンダーは「奴隷制 (slavery)」、不快な (unsavoury)、勇敢さ (bravery) という言葉の韻をふみながら四行詩で要約している。奴隷貿易禁止法成立二百周年を記念する2007年は、このような視点から、ヨーロッパの歴史上の汚点とされる「奴隷制」について考えなくてはならない。二番の歌詞では、第二次世界大戦後の「フランスの解放」に焦点をあて、そこでもアフリカ人の人権が著しく損なわれている人権軽視の「奴隷制」をテーマとしている。

2. 第二次世界大戦が終わったとき、フランスの解放 (Liberation) は、国民 (nation) のための勝利の凱旋パレードによって印象づけられた権力支配者たちは、一同に会して決定 (decision) した
 パリは、全員「白人」の師団 (division) によって解放されるだろうと
 その師団の60%は、アフリカ人 (African) だったのに
 25万人は、アルジェリア人とモロッコ人 (Moroccan)
 でも、チャーチル (首相) とアイゼンハワー (大統領) は、計画 (plan) に合意した
 フランスは「色の黒い人」 (man) にはありがとうと言わないことを

第二次世界大戦末期のパリの解放を劇的に描いたノンフィクション小説

『パリは燃えているか?』によると、1944年8月、ナチス軍の占領下にあったパリは、街中に爆薬をしかけられ、電気やガスは供給されず、市民は飢えに苦しんでいた。8月18日には350万人のパリ市民がすべて動員されてバリケードを築き、市民とドイツの占領軍との間でも何日も小競り合いが続いた。こうしたなか、フランス軍とドイツ軍の激しい戦闘の末、ドイツ軍は降伏し、1944年8月25日、フランスの守護者、聖王ルイの祝日にパリの解放がもたらされた。パリを破壊するという命令を下していたヒトラーから、間一髪で守られたパリ市民は、この日ほど幸福と喜びに充ちあふれたことはないほど歓喜の波は激しく、4年間にわたる苦しい生活を強いられた市民の熱狂は最高に達していた。このパリの解放の立役者とされるのは、フランス陸軍の中でも最新鋭師団の第二装甲師団である。戦車やジープに乗った第二装甲師団の兵士は、あふれかえるフランス人の群衆に熱狂的に迎えられた。パリが解放された翌日の8月26日は、1940年から亡命していたシャルル・ドゴールが入城する日であった。ノートルダムまでの長い凱旋パレードのために、ドゴールは第二装甲師団を沿道に配備した。第二装甲師団の戦車隊と大砲の存在が、ドゴール政権を支持する力がどれほど強大なものであるかをパリ市民に印象づけるねらいがあった。イギリスのチャーチル首相やアメリカのアイゼンハワー大統領の連合軍の役割は終わり、ドゴール政権に併存する軍事行動委員会にゆだねるという案が合意された¹⁷。

アレクサンダーの歌詞にあるように、「フランスの解放」を実現した「英雄」は、全員「白人」の第二装甲師団であると思われる。「白人」の兵士たちはパリ市民の大歓迎を受け、贈り物に囲まれた。「白人」のフランス兵士が「英雄」として象徴される一方、こうした兵士は、カリプソの歌詞からみると、60%がアフリカ人で、かれらは激戦地の最前線で戦っていた。第二次世界大戦におけるフランスの兵士のうち、約25万人がアフリカ出身のアルジェリア人やモロッコ人であるとされている。こうした「黒人」兵士は、激戦地の戦闘要員であり、「英雄」として凱旋パレードには入れられる要員ではなかった。チャーチル首相、アイゼンハワー大統領、ドゴール大統領によっ

て、戦争の最前線で戦ったアフリカ人兵士のために、感謝が述べられることはなかった。

アレクサンダーのカリプソは、歴史の中で重要な役割を果たしながらも、「黒人」であることにより、高く評価されない真の「英雄」をカリプソに歌いこんでいる。その背景には、「白人」だけが英雄視され、「黒人」に対して評価が与えられないという現実が存在することを批判している。イギリスでもジャマイカなどの植民地から約7,000人の兵士がイギリス空軍に従軍した。かれらは主力戦闘要員として戦闘の最前線で宗主国イギリスのために戦った。イギリス人より命を落とす危険性ははるかに高かったかれらが生き延び、再びイギリスの地に來たとき、マスコミは「不要の人々」として報道した¹⁸。

3. カリプソの歌詞から読み解く現代社会における「奴隷制」

奴隷貿易禁止法成立二百周年には、「奴隷制」に対して人々が関心をもちはじめてきた。「今年は奴隷制を思いおこす年」の三番の歌詞は、現代の人々の意識をテーマとしている。

3. メディアの世界では、新たに論争がはじまった (erupted)

これで若い人達の考え方が、いかに誤ったものになる (corrupted) 恐れ
あることがわかった

ある金持ちの十代の女の子が、リアリティショー (show) 番組で、
奴隷制がなくならざるをえなくなってしまった(had to go)ことが残念で
あると言っていた

もはや奴隷制は、階級(class)の問題だけではなくなくなってしまったようだ
このような類いのコメントが広がる (pass) のを許すとき

あらゆる層 (level) の人々が、正しいと感じてしまう

悪魔 (devil) の仕業をより良いものにしてしまうことを

三番の歌詞の問題となるのは、現代でも「奴隷制」を肯定する考えをもつ若

者もいるという現実である。2006年にブレア元首相が「奴隷制」に対して遺憾の意を表明して以来、「奴隷制」について討論される機会がふえてきた。ブレア元首相の遺憾の意に対しても、賛否両論の意見が出された。かれの姿勢に対して、「奴隷制」の問題を考える上で、これまでの首相には見られなかった進展とする肯定派、さらに遺憾の意を表明するだけではなく、謝罪もするべきだという意見、遺憾の意を表明する必要はないとする否定派など様々な考え方があつた。「奴隷制」についてあらゆる階層の人々が発言するようになり、これまでほとんど関心がもたれなかつた問題が表面化したことは評価できるものの、「奴隷制」に対する人々の認識の低さや取り組みに対する温度差を露呈することになった。アレクサンダーのカリブソに登場する十代の金持ちの女の子のように、現代でも奴隷がいたら、楽な暮らしができると考える人々も存在するのである。「奴隷制」がどのようなものであつたかを全く理解せず、過去の奴隷貿易を是認するようなテレビ番組が放映されると、階級の問題を越えて、アレクサンダーは大きな憤りと失望を感じるという。だからこそ、こうした考え方をする人々に奴隷貿易の過去を直視し、少しでも「奴隷制」について人々の理解が得られることを願ってアレクサンダーのカリブソは作られた。「現代の奴隷制」は、必ずしも肉体的な苦痛をとまなう虐待や暴力ではない。差別や無視、あるいは人権を軽視する発言もその中に含まれる。制度上の差別はほとんどなくなつてきたが、人々の意識はまだ変わっていない。アレクサンダーは、「悪魔の仕業」とされる「奴隷制」を容認したり、肯定するという「意識の敵」に対して闘いをやめてはいけなかつと説いている。

イギリス政府の奴隷貿易禁止法二百周年の取り組みでは、21世紀における「奴隷制」に関する問題を重要な課題としている。第一に、アジア、ラテン・アメリカ、カリブ海地域、アフリカなどにおける1,230万人が関わる人身売買という「奴隷制」に対する取り組みがあげられる。現代の人身売買とは、売春など性産業に係るもの、貧困による低賃金労働や子供の労働などである。コンゴ民主共和国、スーダン、ウガンダ、リベリア、ルワンダの武力闘

争という「奴隷制」からの解放も、国連と協力して行なわれるほか、イギリス国内では人種による差別を禁止する「人種の平等」が強化される¹⁹。「奴隷制」は単に過去の問題、アフリカ人だけの問題ではなく、現代に生きるすべての人々の問題であり、現代社会の状況に警鐘をならす問題である。

4. カリプソの歌詞から読み解く被差別者の意識

第4節では、2007年のカリプソ・テント最終日に出場したグレナダ出身のカリプソニアン、ピース・アンド・ラブが奴隷貿易禁止法成立二百周年を記念して歌った「奴隷制をやめさせろ！」というカリプソの歌詞からその内容を検討してみたい。ピース・アンド・ラブは、グレナダでバナナの陸揚げの仕事をしたのち、1959年、20歳でロンドンに渡った。ロンドンでは、修理工場で自動車の解体業にたずさわり、28歳からつくりはじめたカリプソは、カセット・テープ約600本におさめられている。1990年代には、ロンドンのカリプソ・テントでカリプソ・モナークになった経験もある。

1. みんなに言おう！この国に奴隷制があったことを！

これはひどい行為！強い抵抗を示さなくては！

みんなに言おう！民主主義を無視していると！

今でも黒人を奴隷にしている！かれらの母国なのに！

〈コーラス〉

奴隷制をやめさせろ！奴隷制をやめさせろ！我々！は言う

奴隷制をやめさせろ！奴隷制をやめさせろ！いつまでも！

奴隷制をやめさせろ！奴隷制をやめさせろ！我々！家族

奴隷制をやめさせろ！黒人を奴隷にするのをやめさせろ！この国で！

平和をつかまなくてはいけない！天の主なる神様から！

我々がここで生きていくために！平和と愛（ピース・アンド・ラブ）！

平和をつかまなくてはいけない！世界中で！

我々がここで生きていくために！平和と愛（ピース・アンド・ラブ）！
奴隷制をやめさせろ！奴隷制をやめさせろ！どこにおいても！

2. 満場一致の決定により！この場合は証明された！ここイングランドで！
レイシズム（人種差別）！社会排除！政治の腐敗！
権力者の地位！民主主義を無視している！謝罪は言ってもらえない！
ずっと黒人を奴隷にしている！今でもかれらの母国において！

3. みんなに言おう！これは国際的な奴隷制だということを！
人々をこうしたことに取りこむなんて！謝罪は言ってもらえない！
みんなに言おう！民主主義を無視している！
ずっと黒人を奴隷にしている！今でもかれらの母国において！

4. みんなに言おう！我々は謝罪が必要であることを！
黒人にカーニバルを取りもどせ！カーニバルをかれらからとりあげた！
みんなに言おう！民主主義を無視している！
ずっと黒人を奴隷にしている！今でもかれらの母国において！

〈フィナーレ〉

ウフー！イエス！ピース・アンド・ラブ！カモン！カモン！
カモン！国際的な奴隷制をやめさせろ！
そして平等に！世界中で！通貨の価値を！
ウフー！ウフー！イエス！ピース・アンド・ラブ！奴隷制をやめさせろ！

ピース・アンド・ラブは、現在はウエストミンスター区にある公営の老人向けアパートで独り暮らしをしている。そのため、差別感が強く、それを現代の「奴隷制」とむすびつけて闘っている。ピース・アンド・ラブはカリブソニアンの名前であると同時に、かれが1979年に組織として立ちあげた運動

名でもあるが、現在、この運動にかかわる者はかれだけである。ピース・アンド・ラブ・ムーブメントは宗教的な運動で、グレナダで祖母がシャンゴ信仰に深くかかわっていたことに大きな影響を受けたと言われる。土着信仰とキリスト教が重なり、ピース・アンド・ラブの独特な思想が形成されている。

ピース・アンド・ラブの曲は、歌詞の内容にくらべると明るく、軽やかにジャンプしながら歌われるが、イギリスの行政機関の対応、カリブソニアンとしての待遇すべてが人種差別や社会排除とむすびつき、カリブ海地域出身の黒人男性がイギリスで生きていくことの難しさを浮き彫りにしている。カリブ海地域からの移民でも、ロンドン交通局やナショナル・ヘルス・サービスの看護師など公的機関で働いていた人々は、老後に十分な年金を得て暮らしているようであるが、非熟練工として不安定な職場環境にあった者は、ピース・アンド・ラブのように老後の差別意識が強い。また、ロンドンのブリティッシュ・カリブソニアン協会においても、トリニダード出身者が中心性を占めることから、トリニダード以外の地域からの出身者に対して、目に見えない文化的排除が存在すると言われる。グレナダ出身のピース・アンド・ラブは、カリブソニアン協会でも疎外感を感じている。

ピース・アンド・ラブは、1976年からノッティングヒル・カーニバルにかわり、最初は警備を担当するスチュアートとして活動した。このカーニバルでの体験により、ピース・アンド・ラブ運動をたちあげた経緯から、カーニバルに対する思い入れは人一倍強い。1970年代からノッティングヒル・カーニバルにかかわるアフロ・カリブ系の大半は、ピース・アンド・ラブのようにカーニバルが「自分たち」のものでなくなり、「自分たちでない」人々に「とりあげられた」と感じている。現在のノッティングヒル・カーニバルは、アフロ・カリブ系のアイデンティティを形成してきた「古き良き時代」のカーニバルにくらべるとあまりにも管理されすぎ、清潔で、異質なものになっている。

初期の時代からノッティングヒル・カーニバルにかかわる人々の中には、拡大して多民族に進展し、イギリスの行政機関に管理がゆだねられている現

代のカーニバルに対して、被差別者としての意識をもっている者もいる。カリプソ・テントだけでなく、スティールバンドのコンテスト、パノラマなどノッティングヒル・カーニバルに関連するすべての行事が、「古き良き時代」のものから別次元のものになってしまったと感じられている。カリブ海地域からの移民第一世代を中心に、現在のカーニバルにはかれらの求めるものをみいだすことができず、カーニバルの活動から徐々に遠ざかっていく人々がいる。ピース・アンド・ラブは、このような人々の気持ちを代弁するカリプソを作り続けてきた。

5. 現代イギリスのカリプソの歌詞がつたえる「奴隷制」

ロンドンのカリプソ・テントで歌われたカリプソは、CDとして販売されたり、文字化されて記録されることはほとんどないため、奴隷貿易禁止法成立二百周年を記念するカリプソの歌詞を検討することができた意義は大きい。アレクサンダーのカリプソに通底するテーマの背景にあるものは、これまでのイギリスの歴史は「白人」の業績を「白人」の視点から語られてきたことである。カリブ海地域がイギリスの植民地であった時代、子供たちはイギリスの歴史を学び、カリブ海地域や「黒人」の歴史に触れることはなかった。

「今年は奴隷制を思いおこす年」の一番の歌詞にみられるように、イギリスの歴史では、奴隷貿易禁止法成立の立役者は、ウィルバーフォースやクラップム派の「白人」であり、エキアノのような「アフリカ人」の業績はほとんど知られることがなかった。アレクサンダーがカリプソでトゥサンやエキアノに光を当てたのは、かれらが抑圧、暴力、裏切り、差別などに苦しみながらも「奴隷制」廃止に使命をもって貢献してきたからである。「奴隷制」の苦しみは、こうした経験をもつ人たちのみが真に理解できると言えよう。

アレクサンダーのカリプソの二番の歌詞における主張は、歴史の中で「アフリカ人」の貢献がないがしろにされてきたことである。第二次世界大戦では、フランスでもイギリスでも「アフリカ人」の兵士が激戦地の最前線で母国のために戦ったが、命まで捨てる覚悟で戦ったかれらに対する評価は極端

に低く、戦争を記念する式典などは、全員「白人」の兵士によって祝われ、「アフリカ人」はあたかも存在していなかったように扱われている。「人種の平等」が謳われる今日においても、「黒人」に対する待遇格差は存在している。

アレクサンダーのカリプソの三番の歌詞では、「現代の奴隷制」がテーマである。「奴隷制」に対して、肯定的な意見がメディアで堂々と語られるのは、人々の意識の中にこうした考え方があることを示している。ピース・アンド・ラブのカリプソは、心情をリアルに吐露したもので、今でも人種差別と闘う労働者階級の有色移民の生活の厳しい現実を如実に反映している。政府が取り組む「現代の奴隷制」の多くは、イギリスが世界の貧しい地域を人道的に援助するものである。しかし、本稿で取り上げた二つのカリプソでは、現代のイギリスにおいて「奴隷制」があることを指摘している。奴隷貿易の悲惨さ、残酷さ、愚かさをカリプソやカーニバルで訴えても、人々の意識はなかなか変わっていかない。この意識の差異は、マジョリティである「白人」とマイノリティである「黒人」など有色人種との意識の差に根づくものである。政府のレベルでは差別に対する制度上の改正や表面的な改善はなされてきたが、民衆の意識の改革にいたるまでは長い年月がかかるのである。

イギリスの社会批判をするカリプソは、独特な芸術ジャンルを構成している。民族音楽学者のティナ・ラムナリンは、イギリスの社会を対象に歌われるカリプソでは、イギリスという国が意識され、「ブリティッシュネス」が強調されることを論じている²⁰。本稿でとりあげた二つのカリプソも「ブリティッシュネス」が意識されたものである。イギリスの社会構造にみられる二項対立がカリプソで表現され、支配者と被支配者、差別者と被差別者、「白人」と「黒人」、宗主国と植民地という対照性が際立った形で強調されている。このような二項対立は、現代まで引き続く北側の先進資本主義国（イギリス）と南側の開発途上国（カリブ海地域）の不平等構造の問題である「南北問題」や「植民地主義（コロニアリズム）」の問題でもあると言えよう。

注

- 1 HM Government, *Bicentenary of the Abolition of the Slave Trade Act 1807–2007*, Wetherby: Department for Communities and Local Government Publications, 2007, p. 2.
- 2 これについては、木村葉子「ノッティングヒル・カーニバルの仮装芸術が語る『奴隷制』－奴隷貿易禁止法成立二百周年の仮装芸術を事例として－」『年報人類学研究』第1号、南山大学人類学研究所、2011年、109–112頁を参照されたい。
- 3 カリブ海地域の旧イギリス植民地は、現在の国名ではジャマイカ、セントクリストファー・ネビス、アンティグア・バーブーダ、ドミニカ、セント・ルシア、セントビンセント・グレナディーン、グレナダ、バルバドス、トリニダード・トバゴ、ガイアナで、モントセラトなどイギリス領土も含まれる。こうした地域出身者とその子孫を本稿では「アフロ・カリブ系」と記述する。
- 4 メイエル, J. 『奴隷と奴隷商人』猿谷要監修、国苑苑子訳、創元社、1992年、50–51頁。
- 5 池本幸三・布留川正博・下山晃『近代世界と奴隷制－大西洋システムの中で－』人文書院、1995年、118頁。
- 6 上述書 (5) 151頁。
- 7 ウイリアムズ, E. 『資本主義と奴隷制－経済史から見た黒人奴隷制の発生と崩壊－』山本伸訳、明石書店、2004年、92–93頁。
- 8 井野瀬久美恵『大英帝国という経験』講談社、2007年、152–154頁。
- 9 上述書 (8) 62–63頁。
- 10 上述書 (8) 163–165頁。
- 11 ジェームズ, C. L. R. 『ブラック・ジャコバン・トゥサン・ルヴェルチュールとハイチ革命』青木芳夫監訳、大村書店、2002年、13頁。
- 12 浜忠雄『カリブからの問い－ハイチ革命と近代世界－』岩波書店、2003年、137–177頁。
- 13 上述書 (12) 158–160頁。
- 14 Carretta, Vincent ed., *Olaudah Equiano: The Interesting Narrative and Other Writings*, London: Penguin Books, 2003.
- 15 Osborne, Angelina *Equiano's Daughter: The Life of & Times of Joanna Vassa, Daughter of Olaudah Equiano, Gustavus Vassa, The African*, London: Krik Krak, 2007.
- 16 川北稔「十八世紀の黒いイギリス人たち」『周縁からのまなざし－もうひとつのイギリ

- ス近代-』川北稔，指昭博編，山川出版社，2000年，26頁。
- 17 コリンズ，ラリー・ドミニク・ラビエール『パリは燃えているか？（上・下）』志摩隆
訳，早川書房，2005年。
- 18 木村葉子「『移民』か『イギリス国民』か－アレクサンダー・D・グレートのカリブソ
から読み解く『ウエスト・インディアン』の歴史－」『白山人類学』11号，白山人類学
研究会，2008年，79－80頁。
- 19 HM Government, *op. cit.* pp. 24－26.
- 20 Ramnarine, Tina K. *Beautiful Cosmos: Performance and Belonging in the Caribbean Diaspora*,
London: Pluto Press, 2007.

